

【令和 7 年度活動報告】

資料 1－2

※各項目の記号は連携先を示します[官]行政、[学]大学・小中学校、[民]自治会・NPO 法人、[産]民間企業・商店街

事業名	活動名称 (プロジェクト)	目的	活動 課題	成果・課題	評価
	菱野団地まちづくり	地域住民、行政が一体となって、地域の課題解決や魅力向上を図り、持続可能な地域社会の実現を目指す。	活動	<ul style="list-style-type: none"> ・[官][学][民]地域住民、行政、大学が一体となった中央広場の整備や多文化共生フェスタの開催を通じ、住環境の質的向上と賑わい創出を強力に推進した。 ・[民]各連合自治会への定期報告や、原山台地域力向上委員会マルチ交流文会、萩山台 SDGs プロジェクト等との協働により、組織の枠を超えて地域課題を共有する協力体制を維持・発展させた。 	△
			課題	<ul style="list-style-type: none"> ・現場活動（駄菓子屋、大学生 Day 等）は非常に活性化しているが、事務や意思決定を担う運営人材が極めて限定的であり、特定役員への過度な負担が組織の限界を招いている。 ・現状の活動規模に運営体制が追いついていない。令和 8 年度のみつば小学校開校や民間連携拡大を見据え、人手不足を前提とした「活動のスリム化」や「他団体との業務共有」など、会の存続を最優先とした無理のない組織形態への再編が不可欠である。 	
拠点利用・運用事業	駄菓子屋	<ul style="list-style-type: none"> ●地域コミュニティの活性化 幅広い世代が集まる場所となり、地域コミュニティの活性化に貢献する。 <ul style="list-style-type: none"> ●子どもの居場所づくり 子どもたちが安心して過ごせる場所を提供する <ul style="list-style-type: none"> ●地域の魅力向上 駄菓子屋の情報を発信し、地域の魅力を向上させる	活動	<ul style="list-style-type: none"> ・週 5 日の安定した開所を継続し、子どもたちが放課後に安心して過ごせる第三の居場所としての役割を定着させた。 ・[学]近隣の幼稚園や小学校の「買い物体験」を受け入れ、地域住民が子どもたちを共に育む公益的な学びの場として機能させた。 ・駄菓子屋の運営を通じた仲間づくりにより、新たな住民サポーターを確保した。 	◎
			課題	<ul style="list-style-type: none"> ・特定のスタッフに過度な負担が集中している現状を改善するため、効率的なシフト管理や大学連携による IT 活用など、体制の再整備が必要である。 ・売上・経理情報の透明性を高め、執行部および会員に対して適時適切な収支報告が行えるよう、管理体制の見直しを図る 	
	拠点活用	<ul style="list-style-type: none"> ●地域コミュニティの活性化 活動拠点を地域住民が集まる場として地域コミュニティの活性化を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ●拠点運用の効率化 他団体への貸し出しを行い、活動拠点の稼働率を上げ、有効活用する。	活動	<ul style="list-style-type: none"> ・[民]「こどもカフェ」「ウクレレ教室」「もりのね幼稚園」「健康体操」等、多様な主体による定期利用を促進し、拠点の稼働率を大幅に向上させた。 ・[学]愛知工業大学による「大学生 Day」を月 2 回開催し、子どもの学習支援や高齢者向けスマホ教室を通じて、学生と住民が交流する多世代共生の場を創出した。 ・[官]瀬戸市こども・若者支援活動応援金を活用し、安心して過ごせる第三の居場所としての役割を定着させた。（駄菓子屋にも記載） 	○
			課題	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点の持続的な維持管理のため、利用団体等からの「拠点活用協力金」の適正化を図り、安定的な運営体制を確立する。 ・一般利用が可能であることの周知が不足しており、全住民に向けた積極的な情報発信と利用案内を推進する。 	
	TEAM ふれあい場 (中央広場の整備)	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の景観向上 花壇を整備することで、地域の美観を高め、快適な空間を創出する。 <ul style="list-style-type: none"> ●環境教育の場 子供たちへ植物の育成を通じた環境教育の場を創出する。	活動	<ul style="list-style-type: none"> ・[官][学]大学（愛知工業大学、南山大学、名城大学）と中央広場の指定管理会社との協働により、ベンチの設置、公園植物の植樹、ステージ木部のペンキ塗り等の補修を行い、住民が憩える広場環境を維持・改善した。 	○
			課題	<ul style="list-style-type: none"> ・広場設備の老朽化に対し、大学生等の外部活力に頼るだけでなく、地域住民が主体的に維持管理に参画し続ける仕組みづくりが求められている。 ・花壇の整備が計画通りに進まなかった要因を分析し、苗代等の予算確保や、学校・幼稚園と連携した「環境教育」としての日常的な手入れ体制の構築が必要である。 	
	イベント	<ul style="list-style-type: none"> ●にぎわいの創出 中央広場や拠点を活用し、にぎわいの創出につながるイベントを開催する。 <ul style="list-style-type: none"> ●地域の魅力発信 活動の周知、地域のブランド力を向上させる。	活動	<ul style="list-style-type: none"> ・[官][学][民]瀬戸市万博 20 周年記念応援金を活用し「多文化共生フェスタ」を開催。多くの外国籍住民がステージ出演や出店に主体的に協力し、国籍を超えた交流の場を創出した。 ・大規模イベントの開催を通じて拠点の活動を広く周知し、団地内外からの来場者を誘致することで、活気ある地域イメージの形成とブランド力の向上に寄与した。 	◎
			課題	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生フェスタで得られた外国籍住民との接点を一過性のものにせず、日常的な見守り活動や拠点利用へと繋げるための継続的なネットワーク構築が課題である。 ・外部助成金に依存した大型イベントだけでなく、自主財源やボランティア負担を考慮した、安定的かつ継続的に開催可能なイベント形式の検討が必要である。 	

広報事業	情報発信	<p>●地域活動の認知度向上： 活動内容やイベント情報を発信し、認知度を高め活動の参加や協力を促す。</p> <p>●地域の魅力向上とブランド化： 地域の魅力や個性を発信し、ブランド力を高める。</p>	活動	<p>・[学]南山大学石川研究室の協力により、洗練されたデザインの広報誌発行や SNS 発信を実施し、地域住民のみならず小中学校へも会の活動を広く周知し多世代への認知度を向上させた。</p> <p>・[学]愛知工業大学野澤研究室の協力により、拠点「ひしのミナクル」内外に専用掲示板を製作・設置した。ポスター掲示等のアナログ媒体とデジタル発信を併用することで、情報の到達率を補完し、全住民が活動に触れやすい環境を整備した。</p>	◎
			課題	<p>・子育て世代、高齢者、外国籍住民など、各層に響く情報の出し分けが不十分であり、特に「みつば小学校」の保護者層へ向けた戦略的な広報体制の構築が必要である。</p> <p>・大学のサポートに依存するだけでなく、事務局や住民サポーターが日常的に、かつタイムリーに情報を発信し続けられる運用の仕組みづくりが求められている。</p>	
運営事業	収益事業	<p>●活動資金を継続的に確保するため、自主的な財源の確保を行う。</p>	活動	<p>・[学]団体の持続性を高めるための新たな会費制度を構築し、2026 年度からの本格収集に向けて、広報誌と共に全戸へ案内を配布する等の基盤整備を行った。</p> <p>・[官]瀬戸市万博 20 周年事業応援金」や「こども若者センター居場所応援金」を獲得し、特定事業の実施に必要な原資を公的助成により確保した。</p> <p>・[学]拠点利用協力金の徴収を定着させるとともに、名古屋学院大学による「団地ツアー」の受け入れ等、地域の資源を活かした独自の収益機会を創出した。</p>	△
			課題	<p>・収益の柱である「草刈り受託事業」において、深刻な人手不足と炎天下での過酷な作業による身体的負担が限界に達しているため、継続が不可能と判断。メンバーの安全確保と持続性の観点から、労働集約型ではない新たな収益構造への転換が急務である。</p> <p>・公的助成金は単年度のものが多く、家賃等の固定費を安定して賄えるレベルには至っていない。会費納入率の向上や、持続可能な協力金制度など、組織が「自走」できるレベルの自主財源確保に向けた体制再編が必要である。</p>	
協働事業	大学との連携	<p>●地域課題の解決と地域活性化 大学の専門知識や研究成果を活用し、課題解決や活性化に貢献する。</p> <p>●地域イノベーションの創出 産学官連携を促進し、新たな地域の価値を創出する。</p>	活動	<p>・[学]「多文化共生フェスタ」において、大学の企画・運営協力を得ることで、学生と外国籍住民が交流する先進的な多世代共生モデルを実践した。</p> <p>・[学]中央広場でのベンチ製作や落書き消しワークショップを住民と協働で実施し、学生の創造性を活かした居心地の良い景観整備と愛着形成を図った。</p> <p>・[学]広報誌の製作による活動の可視化や、月 2 回の「大学生 Day」開催を通じた学習支援・スマホ教室により、日常的な学民連携の場を定着させた。</p>	◎
			課題	<p>・学生の入れ替わりによる活動の断絶を防ぐため、大学側の研究成果（将来像の提案等）を団地再生計画に正式に組み込み、一過性でない継続的な協力体制を維持することが課題である。</p> <p>・大学側への依存度が高い項目を精査し、事務局や住民サポーターが自律的に運用できる領域を増やすことで、互いに持続可能なパートナーシップを再構築する必要がある。</p>	
	他団体との連携	<p>●地域課題の包括的な解決 地域課題に対し、各団体の協働により効果的かつ包括的な解決を目指す。</p> <p>●地域全体の活性化 人材、施設、情報などを共有・活用し、効率的な事業運営につなげる。</p>	活動	<p>・[民] NPO 法人まごころと連携し、高齢者を対象とした健康体操等の活動場所として拠点を提供。定期的な集いの場を維持することで、参加者の健康維持と日常的な交流を支えた。</p> <p>・[民]「こどもカフェ」や「もりのね幼稚園」と連携し、悩み相談や学習支援、自然体験活動の場を拠点と統合することで、地域全体で子どもを育む環境を整備した。</p> <p>・[官][学][民]大学の多様な専門組織との共同事業を通じて、単独団体では困難な高度な地域課題への対応力と情報発信力を向上させた。</p> <p>・[民]「多文化共生フェスタ」において、原山台地域力向上委員会(マルチ文化部会)や萩山台 SDGs プロジェクト等の出展協力を得て、各組織の活動周知を行った。お互いの活動や課題を共有する関係を築いた。</p>	○
			課題	<p>・各団体との交流は進んでいるが、今後は事務局の負担軽減や財源の相互融通など、より実務的・経営的なメリットを生む踏み込んだ連携スキームの構築が求められる。</p> <p>・各団体の活動情報が分散しているため、当会がハブとなり、住民が「ここに来れば地域の全ての活動がわかる」と感じられるような情報集約・発信体制の強化が必要である。</p>	

プロジェクト	こどもサポート ・育成 プロジェクト	<p>●子どもの居場所づくり 子どもたちが安心して過ごせる場所、相談、学習できる場所を提供する。</p> <p>●次世代の地域社会の担い手育成 地域への愛着や誇りを育み、地域社会担い手となる人材を育成する。</p>	活動	<p>・【民】日常的な駄菓子屋の運営や「こどもカフェ」との連携により、単なる遊び場に留まらない、子どもたちの悩み相談や学習支援も可能な「多機能な居場所」として機能させた。</p> <p>・【学】【民】「光陵フェスティバル」（11月8日）の実行委員会にオブザーバーとして加わり、4月～12月の間、計11回の継続的な協議と当日の運営サポートを通じて、学校と地域の連携強化に寄与した。</p> <p>・「お手伝いカード」のブラッシュアップにより、より子どもたちが地域活動を自発的に手伝う仕組みを構築。大人との協働を通じた成功体験を提供し、活動を「自分事」として捉える次世代育成の土壌を築いた。</p>	◎
			課題	<p>・活動の継続性を高めるため、特定の個人に依存しない運営マニュアルの整備や、保護者・学生ボランティアを巻き込んだ「仕組みとしての見守り体制」の検討が必要である。</p> <p>・参加する子どもたちのニーズをより詳細に把握し、みつば小学校の開校を見据えて、より多くの児童・生徒が主体的に関われるプログラムの開発と周知が求められている。</p>	
	多文化共生 プロジェクト	<p>●地域コミュニティの多様性向上 多様な文化を理解し、尊重し、共に暮らすことができる社会の実現を目指す。</p> <p>●地域課題の解決 外国籍住民の課題やニーズを把握し、多文化共生社会の実現を目指す。</p>	活動	<p>・「多文化共生フェスタ」を開催し、外国籍住民によるステージパフォーマンスや伝統菓子の販売等を通じて、住民が多様な文化に直接触れ、相互理解を深める貴重な機会を創出した。</p> <p>・フェスタの企画・運営に外国籍住民が「創り手」として参画したことで、地域活動への参加意欲を高めた。</p> <p>・【民】瀬戸くらし研究所主催の「ことばコミュニケーション部」に参加。「やさしい日本語」の活用術を学び、言語の壁を越えた円滑な情報発信や対話のための指針を得た。</p>	△
			課題	<p>・フェスタによる交流を一過性のものにせず、日常的な拠点利用や見守り活動へと繋げるための、緩やかで継続的なコミュニケーションの場づくりが求められている。</p> <p>・外国籍住民が抱える日常的な困りごとを吸い上げる体制が未整備であり、看板の多言語化や多言語による情報発信など、安心感を与える環境整備が必要である。</p>	